

# 埋文やまがた



2019年3月4日  
Web版第6号  
(第62号)



山形市 なかのめ 中野目II遺跡

古墳時代中期の竪穴建物跡です。  
一边が8mほどもあります。

※遺跡の詳細は、トピックスのページ(P6)で

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

YAMAGATA PREFECTURAL CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH  
〒999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地 TEL 023-672-5301(代) FAX 023-672-5586  
ホームページ : <http://www.yamagatamaibun.or.jp>  
メールアドレス : [yac@yamagatamaibun.or.jp](mailto:yac@yamagatamaibun.or.jp)

# 平成30年度 文化財普及啓発事業

今年度、山形県埋蔵文化財センターでは、文化財普及啓発事業の一環として、「発掘調査説明会」、「職場体験」、「センター見学・遺跡見学」、「体験学習」、「なつやすみ子どもミュージアム」「発掘調査速報会(県教委との共催)」「考古学講座」等を実施しました。(予定を含みます。)

## 発掘調査説明会

	市町村	遺跡名	遺跡種別	開催日
1	山形市	川前2遺跡	集落跡	10月6日
2	山形市	中野目Ⅱ遺跡	集落跡	10月6日

## 職場体験

	団体名	期日
1	上山市内中学校「キャリアスタートウィーク」	7月3日～5日
2	山形県立上山明新館高等学校	8月8日～9日

## 体験学習

	団体名	期日
1	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 「勾玉・弓矢・石器をつくろう！」	5月19日
2	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 「勾玉・弓矢・石器をつくろう！」	7月14日
3	遊佐町教育委員会 縄文食体験講座	9月18日
4	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 「勾玉・弓矢・石器をつくろう！」	11月3日

## センター見学・遺跡見学・施設利用

	団体名	期日
1	上山市立南小学校第5学年	5月1日
2	上山市立中山小学校同窓会	5月10日
3	山形県立山形聾学校小学部6学年	5月17日
4	うきたむ風土記の丘考古資料館(写真撮影研修)	5月22～24日
5	日本学術振興会 科学研究費補助金基盤研究(B)プロジェクト	6月10日
6	尾花沢市文化財保護委員会(赤外線による鑑定)	6月15日
7	うきたむ風土記の丘考古資料館(写真撮影研修)	7月6日
8	いわき市教育委員会 教育委員	7月12日
9	仙台市教育委員会(出土遺物の閲覧)	7月17日
10	山形県立博物館ボランティア	11月5日
11	寒河江市教育委員会(出土遺物の鑑定)	1月28日
12	中山町柳沢地区(和算額の赤外線鑑定)	1月31日
13	(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	2月14日
14	土偶研究会(研究報告会)	3月10日

※3月分は予定

## 発掘調査説明会



↑ 出土遺物の解説

← 発掘現場の見学



# 平成 30 年度「考古学講座」

## 特別講演会

今年の「考古学講座」特別講演会は、東北学院大学の佐川正敏先生をお招きして実施しました。

昨年度までは東北学院大に客員教授として来られていた中国の先生による講演で、佐川先生には通訳・解説としてお話をいただきましたが、今年はご本人によるご講演をいただくことができました。

ご自身のモンゴルでの発掘経験から、なかなか耳にすることのない興味深いお話をたくさんうかがうことができました。

期日：平成 31 年 2 月 19 日(火)

演題：北アジア遊牧国家の考古学

—モンゴルでの発掘調査経験を中心に—

講師：佐川正敏 氏（東北学院大学文学部教授）



## センター談話会

2 月 28 日(木)第1回『山形県の災害考古学』(植松)

3 月 7 日(木)第2回『日本で一番有名な石槍の作り方』  
(大場)

3 月 14 日(木)第 3 回『八反遺跡の一括出土錢』(高桑)  
(3 月分は予定)



センター談話会は、職員による個人研究の発表会・勉強会です。昨年度から一般の方々にもお知らせし、一緒に参加していただいています。

皆さんもお時間がありましたら、センター職員と一緒に勉強してみませんか？

# 平成30年度 発掘調査トピックス

ふじしまじょう

## 藤島城跡 第7次

— 河川を活用し防御する —  
中世城郭

鶴岡市

藤島城跡は、月山を源流とする藤島川東側の自然堤防上に立地する城跡です。城跡の時代は中世、様式は平城です。本丸には現在、八幡神社が祀られており、本丸の土壘と水堀の一部が残存しています。ほかの城跡の大部分は学校用地として利用されています。

今回の調査は7次調査になり、調査区は城跡の北西部部分（周縁部）に相当します。広く後世の攢乱を受けているものの、これまでの6次に亘る発掘調査成果と同様、中世の遺構・遺物が検出・出土しました。

主な遺構は井戸跡と土坑で、他に柱穴や性格不明遺構などが検出されました。明確な建物の存在は確認できませんでした。

井戸跡は1基確認されました。素掘りの構造で、平面は不整形、断面はV字状を呈しています。長軸は約1.5m、深さは約1.6mを測ります。調査段階では水が湧き出ることはませんでしたが、形状から井戸跡と判断しました。また、近接する4次調査区の北西部で井戸跡が多数確認されており、当該地は比較的地下水が豊富であったことが推測されます。

直径1.5m前後の土坑が調査区南側で集中して確認されています。前述した井戸跡同様、4次調

査区の北西部においても多数確認されており、当該地での遺構の密度が高いことが窺われます。

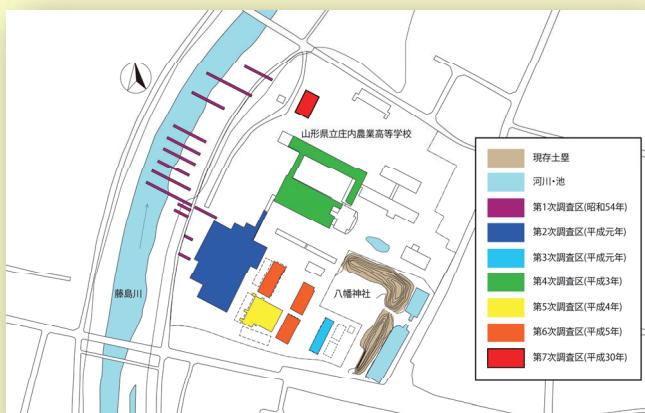
遺物は陶磁器を中心とし、他に石製品（砥石）や金属製品（古銭）が出土しています。出土量は少なく、さらに遺構内出土の遺物も少なく、破片資料のみで全体が把握できる資料は限りなく少ない状態です。

陶磁器は中国産の青磁、国内で生産された瀬戸・美濃（愛知県・岐阜県）、珠洲（石川県）系の陶磁器が出土しています。

今回の調査により、7次調査区南部から4次調査区北西部にかけて、井戸跡や土坑が密集していることが推測されます。  
(吉田 満)



調査区遠景(上が南)



調査区概要図(縮尺任意)



井戸跡

かわまえ

# 川前2遺跡 第5次

—古墳時代から古代にかけて—  
—営まれた集落跡—

山形市

川前2遺跡は、山形市と中山町との市境で、奥羽山系の蔵王連峰に源を発する須川左岸の自然堤防上の微高地に立地し、遺跡周辺には中野目Ⅱ遺跡や上敷免遺跡、達磨寺遺跡など古墳時代や古代の遺跡が多く分布しています。川前2遺跡の調査は平成14・15・19・20年の須川河川改修事業に伴う調査に続いて5次調査となります。

今回の調査では主に、堅穴建物跡、土坑、溝状遺構、柱穴が検出されています。調査区南側で検出された溝状遺構は、調査区外に伸びると想定されるためその全容ははっきりとしないものの、約6.8×6mの方形を呈するものと思われ、その形状から山形県内ではあまり数が確認されていない古墳時代前期の方形周溝墓の可能性があると考えられます。

出土遺物は古墳時代前期と古代を主とし、前者が大半を占めます。前述した方型の溝状遺構からは高壙などの土師器や砥石が出土しています。また、その外側に位置するL字型の溝状遺構からは北陸の影響を受けたと思われる装飾器台が出土していますが、壙部に刻目の入る珍しいもので山形県内ではあまり数が確認されていません。これらの遺構の南側に隣接する土坑からは、廃棄された



方形の溝状遺構。内側の溝からは高壙などの土師器が、外側の溝からは装飾器台が出土しています。

とみられる土師器が多量に出土しており、いずれも古墳時代前期の所産となります。その他、調査区北側からは、口縁部に重四角文が施されている弥生時代中期後半の甕の破片、古代の横瓶や「鬼」と墨書された須恵器壙、石製の紡錘車などが出土しています。

これまでの第1～4次調査では、断続的ではあるものの古墳時代から古代までの長期に渡って営まれた集落跡であることが確認されていますが、今回の調査により、西側にその集落の広がりを確認し、本遺跡では初めて検出された方形周溝墓により新たな集落の様相が見えてきました。

(白戸このみ)



調査区全景(南西から撮影)



溝の南側に位置する土坑からは、廃棄されたとみられる甕など多数の遺物が出土しました。

前号  
**考古学クイズ**  
の答え

①

地鎮祭などの際に、お祓いに使われたものではないかと考えられています。9世紀頃、山形県では地震や火山の噴火が相次いでおり、全国に先駆けて朝廷から陰陽師(おんみょうじ)が派遣されていました。

# なかのめ 中野目Ⅱ遺跡

—県内最古の鍛冶炉を発見—

山形市

中野目Ⅱ遺跡は、山形市の北西部、須川の自然堤防上に立地する集落遺跡です。調査は須川の改修に伴い実施され、今回で第2次調査になります。遺跡では複数回の洪水による堆積が確認され、それにパックされるように古墳時代、平安時代から江戸時代までの痕跡がのこされていました。ここでは、特に重要な発見のあった古墳時代についてみてみましょう。

山形の古墳時代は、本格的な稻作の開始に伴い、たくさんの土地開発が行われた時代です。その開発を支えたのは、従来の木・石製にかわる鉄製の農工具の普及が大きかったと考えられます。集落遺跡から出土するものは少ないものの、古墳からは剣や矢のほか、スコップの刃先なども出土しています。

では、これらの鉄製品を加工する技術は、県内にいつ頃からあったのでしょうか。それを物語る資料として、山形市に所在する大之越古墳から出土した鍛冶に使う金鉗（焼けた鉄をつかむハサミ）があります。この古墳は5世紀の中頃に位置づけられるため、同時期には鍛冶技術が山形にも伝わっていたことをうかがわせます。しかし、鍛冶道具は発見されても、肝心の鍛冶そのものの痕跡をのこす遺跡というのは、6世紀の後半になってか

らわずかに見られるだけでした。

今回、ST101建物跡とした遺構で発見されたのは、強い熱を受けて変色した床や、鍛冶の際に出る溶けた不純物のかたまり（スラグ）、ふいごからの風を送る粘土製の送風管など、鍛冶の痕跡を明確に示すものでした。これらの出土状況から、この建物は鍛冶工房として機能したもので、ともに出土した土器をみると5世紀前半～中頃のものと判断できます。よって大之越古墳と同じく、より古い段階で鍛冶技術が伝わっていたことを示す確かな証拠を得たといえます。宮城県や福島県においても同時期に鍛冶の痕跡が発見されはじめるので、これらの地域と大きな時間差なしに山形にも鍛冶技術が伝わっていたと解釈できるでしょう。

今回の調査では、この鍛冶工房も含めて古墳時代の建物跡が3棟発見されました。いずれ多くの土器を伴うもので、小型で丸底の壺や脚付きのうつわを主体とすることから、5世紀の前半～中頃のものと判断できます。古墳時代は4～6世紀まで続きますが、今回発見の時期の遺跡は、県内では発見されることが少ないため、空白期となっています。今回の調査成果は、この空白を埋める重要な資料となるでしょう。

(天本昌希)



調査区全景、中央に須川が流れる。(北から)



鍛冶工房と考えられるST101建物跡。

## 編集後記

今年は雪が少なくて、通勤には大変助かりました。センターのある場所は住所こそ上山市ですが、気候

も人々の気風も置賜寄りです。山形県埋文センターは、上杉方の出城(中山城)の麓にあります。